

ウクライナ

穀物供給国ロシアと比べれば

ジェトロ海外調査部欧州ロシア CIS 課 菱川 奈津子

ロシアとウクライナを中心とする黒海北岸地域は、伝統的な穀物生産地である。両国ともアジアへ販路を求める動きがある中、ロシアは輸送面での課題が壁となり、輸出の足取りは重い。一方ウクライナは、近年トウモロコシの生産・輸出能力を高める。CIS 有数の穀物生産国であるロシアとウクライナの現状と供給国としての可能性を比較する。

ロシア産穀物に輸送費の壁

黒海沿岸地域、中でもロシアは小麦が世界第5位の3,772万トン、大麦が同1位の1,395万トンの生産量を誇る（2012年）。ソ連崩壊後に穀物生産量は減少したが、1998年の4,780万トンを底に回復し、2008年には1億820万トンの豊作を記録した。輸出国としても地位を固めつつあり、12/13穀物年度（12年7月～13年6月）の小麦輸出量は世界第4位の1万1,300万トン、大麦輸出量は第3位の2,200万トンだった。

ロシア産小麦、大麦の主要輸出先は中東・アフリカ諸国が中心だ。ロシア政府は穀物価格が高騰した07年以来、穀物輸出国としての自国の立場を強調してきた。議長国を務めた12年のアジア太平洋経済協力会議（APEC）首脳国会議でも、食糧の需要拡大が見込まれるアジア・太平洋地域に対して穀物の供給を提案するなど、世界の穀物市場への積極的関与を表明している。ロシア穀物連盟のアレクサンドル・コルプト副会長によれば「ここ数年は輸出先の多角化が図られており、アフリカの東部および西部、南米、東南アジアへも輸出されている」という。

日本でも同時期、穀物輸入先の多角化を目指してロシア産穀物への期待が高まり、09年にはロシア産小麦が初めて輸入された。しかし10年に起きた干ばつによる穀物の大幅減産で、ロシア政府が穀物輸出禁止

措置を取ったことをきっかけに、対日輸出は頓挫した。

ロシアと日本の需給ニーズは一致しているのにもかかわらず、輸出が進まないのはなぜか。大きな理由は、①輸送コスト、②インフラの未整備だ。ロシア穀物生産者連盟のパヴェル・ワレリエヴィッチ会長は、ノヴォロシスク港から船で黒海を經由して（日本を含む）アジア方面に輸送するのは、「海上輸送費がかさみ利益を出すことが難しい」との見解を示す。シベリア鉄道で日本に程近い極東港湾まで陸上輸送する手もあるが、鉄道輸送料金が大きい。

また極東港湾には、穀物専用の保管施設や積み替え施設がなく、大量の穀物を扱うことができないという問題もある。ウラジオストク商業港で一部穀物を取り扱うが、穀物を積んだ鉄道貨車をクレーンで船に積み替えるという方式だ。穀物メジャー・グレンコアのロシア子会社である国際穀物会社の担当者は、「極東の港湾整備がされない限り日本向け輸出は難しい」と語る。極東港湾の開発では、穀物ターミナルの建設計画があるものの、今のところ建設着工などの具体的な動きは見られない。

輸出余力増すウクライナ

CIS 地域の中で、もう一つ穀物の有力な供給国がある。隣国ウクライナだ。ロシア同様に小麦、大麦の生産地だが、近年トウモロコシの生産量が伸びている。11年には2,284万トンと、小麦のそれを上回った。その生産量は02年の世界第21位から、12年には第7位と着実に順位を上げた。

ウクライナの強みは、農業に適した肥沃な黒土に恵まれていること。それは「夜に苗を植えたら、翌朝には木になる」ということわざに表現されるほどだ。播種面積はロシアを大きく下回るものの、単収では上回

表 ロシア・ウクライナ産主要穀物の供給力比較 (2012年)

主要生産穀物	ロシア			ウクライナ		
	小麦	大麦	トウモロコシ (飼料用含まない)	トウモロコシ (飼料用含まない)	小麦	大麦
生産量	3,772万トン	1,395万トン	821万トン	2,096万トン	1,576万トン	694万トン
播種面積	2,468万 ha	882万 ha	206万 ha	437万 ha	563万 ha	329万 ha
単収	1.8トン/ha	1.8トン/ha	4.2トン/ha	4.8トン/ha	2.8トン/ha	2.1トン/ha
土壌	・寒冷地も多いため、生産輸出拠点はロシア南西部が中心			・世界の黒土の4分の1がウクライナに集中するといわれ、肥沃な土地を有する		
主要輸出先 (上位3カ国)	エジプト、トルコ、 イラン	サウジアラビア、 イラン、インド ネシア	トルコ、スペイン、 イスラエル	エジプト、イスラ エル、シリア (2010年)	エジプト、チュニ ジア、イスラエル (2010年)	サウジアラビア、 イスラエル、ヨ ルダン (2010年)
生産量に占める 輸出量の割合 (12/13穀物年度)	30%	16%	23%	61%	46%	31%
港湾設備	・ノヴォロシスク港 (穀物輸出の9割を扱う)			・大型船舶 (5~12万トン) の乗り入れが可能な港として、オデッサ港、ユーヅナヤ港、イリチョフ港、セヴァストーポリ港がある		
輸出規制	・小麦、大麦、ライ麦、トウモロコシに対する輸出禁止措置 (10年8月15日~11年6月末。小麦は10年12月末まで)			・小麦、大麦、トウモロコシ、ライ麦、ソバに対する輸出割当 (10年10月19日~11年6月末。トウモロコシは11年5月5日、小麦・大麦は11年6月3日にそれぞれ規制廃止) ・小麦、大麦、トウモロコシに対する輸出税賦課 (11年7月1日~12年1月1日。10月22日から小麦およびトウモロコシの輸出税を廃止)		
課題	・生産地から極東港湾までの高額な鉄道料金 ・アジアへの窓口となる極東の港湾における穀物専用ターミナルの未整備			・上記以外で複雑かつ頻繁に変更される法律・制度 ・政府の財政難による生産者支援の形骸化 ・貨車、保管庫の不足		

資料：現地ヒアリング、各種資料を基に作成

る (表)。米国や中国などトウモロコシ主要生産国と比べた場合、単収は依然低い水準だが、農機の更新や肥料の使用が拡大すればさらに伸びるとみられる。

もう一つの強みは、ロシアに比し大きな輸出余力があることだ。特にトウモロコシは、国内需要が増加傾向にあるものの、11/12 穀物年度以降、生産量の約6割を輸出に回している (表)。12/13 穀物年度は世界第4位の1,273万トンを輸出した。今後も国内消費量をカバーしつつ一定の輸出量を維持できれば、世界でも有望な穀物輸出国となろう。

増産を追い風に、輸出先の多角化にも関心が高まる。表を見ると、主要輸出先はエジプトやイスラエルなどの中東・アフリカ地域だが、輸出業者の間では「日本や中国、インドネシアなどといったアジア諸国への関心が高まっている」とウクライナ穀物協会のロジオン・リブチンスキー事業部長は説明する。「既存の輸出先は価格上昇に敏感。不安定な政治情勢も懸念事項」である一方、人口が多く、GDP (国内総生産) が大きいアジアは新規輸出先として魅力的なのだ。輸出先をアジアへ広げたいとの希望はロシアに共通している。

懸念は貨車不足

とはいえ課題もある。例えば、ウクライナ国内での穀物専用貨車の不足だ。貨車が最も必要となる収穫期 (8~9月) には予定通り出荷できない状況も出てきている。生産拡大に貨車数が追いついていないことは、潜在的懸念事項といえる。現地の輸送会社トランスグループの担当者によれば、国有鉄道会社は貨車数を増やす予定はなく、貨車の追加購入は民間企業にとっては投資規模が大きく解決が難しいという。前出のリブチンスキー事業部長は「今後、生産量が2~3割増加すれば、輸送インフラの問題が深刻化するだろう。インフラ整備は多額の資金が必要だが、(財政難の) 政

府が行うため見通しは不透明」との見解だ。他にも複雑かつ頻繁に変更される制度などが指摘されており、政府が解決すべき課題は多い。

ウクライナは政府主導で、中国へのトウモロコシ輸出を始めた。中国にとっては、輸入先多角化によるリスク分散の狙いがある。ウクライナは、13年末までに200万トンのトウモロコシ (15億ドル相当) を輸出すると引き換えに、中国から30億ドルの資金供与を受ける契約を交わした。需要国への農産品輸出と開発資金の調達の間接的な機会を得たわけだ。この資金は農業関連設備の更新や南部の農地を開発するなど農業振興に充てられる予定だ。現地関係者の間では「政府による資金の使途実態は不透明。空港-市内間の鉄道への投資など、穀物輸出にはメリットがない案件もある」との声も聞かれる。だが、順調に進めば、財政難で農業分野への支援が置き去りにされている現状を打破するきっかけとなり得る。

穀物供給国としてアジアに販路を求めるロシアとウクライナ。穀物輸入大国である日本にとっては、輸入先の多角化という点でニーズが一致する。それぞれ懸念事項はあるが、同じく需要大国である中国が動き始めた今、CIS地域の穀物供給国からの輸入可能性についても一考の価値はあるのではないだろうか。

